

## X 将来の東京の姿を見据えて

アジアヘッドクォーター特区は、外国企業及びその従事者たる外国人のビジネス環境、生活環境整備のための取組である。

しかしながら、「住んでよし訪れてよしの国づくり」という言葉があるように、外国人にとって暮らしやすい東京とは、外国人だけにとって暮らしやすい都市ではなく、東京に住む我々にとって暮らしやすい都市とすることが大前提である。

そのため、我々、アジアヘッドクォーター特区地域協議会は、将来の東京の姿として、以下のような都市のイメージを共有した上で、このような都市の創造に向けたアジアヘッドクォーター特区域内ビジョンを描いた。アジアヘッドクォーター特区は、その実現のための一里塚として推進していくものである。

なお、平成24年1月に公表された国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口によると、100年後の日本の総人口は、合計特殊出生率が2010（平成22）年実績の1.39から1.60に上昇したとしても約6,500万人程度に減少していると推計されている。しかしながら、こうした推計は、今後の取り組む施策等により左右される面があり、人口減少に歯止めをかける政策を国を挙げて展開することにより、このような事態を回避することも可能である。このため、将来の日本をどのような姿にしていくかといった観点から、様々な政策について国に対し提言していくことも、今後の取組として考えていく必要がある。

### <将来の東京>

- 東京は、首都として日本の経済を牽引しているとともに、アジア諸都市との都市間競争を勝ち抜き、アジアのヘッドクォーターとしての地位を堅持している。
- 山手線内に流入していた約300万人のうち半数程度が定住化する結果、山手線内の昼夜間人口比率は、ニューヨーク、ロンドン、パリと同程度の1.5程度となっている。
- ビジネス、観光で訪れる外国人、東京で暮らす外国人も、言葉の壁を感じることなく、母国と変わらない、あるいはそれ以上に快適に暮らすことができる。
- 在宅勤務やサテライトオフィス勤務など、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方が進展することや職住近接が進み、ビジネスも生活も同一圏内で営まれ、長時間通勤や交通混雑といった東京一極集中の弊害といわれていた事象は解消している。
- 公共交通機関の駅から徒歩5～10分圏以内にすべての都市機能が存在する

「ウォーキングディスタンスのコンパクトな都市」が形成されている。

- 東京全体を鳥瞰的に見ると、道路や川に沿って大きなグリーンベルトが形成されているほか、特区エリアを中心に形成された高層ビル群の中には日常空間としての大規模な森が出現するなど、現在の倍以上の緑地が新たに創出され、「ガーデンシティ」と称される緑豊かな美しい街並みが形成されている。
- 隅田川を始めとする東京の河川や運河などにおいて、年間を通じて人々が水辺で憩い・楽しむことが日常化し、かつて「水の都」と謳われた東京の水辺の賑わいが復活している。
- 高層ビル群で形成されるクラスター内は、上空から地下まで高密度な利用が図られ、オフィス、商業施設、文化・娯楽施設等のほか、住宅、医療、介護、予防、生活支援サービス等を提供する施設などが調和をもって配置されている。
- 街並みは、それぞれのエリアごとに特色を持ちつつ、エリアごとの街並みの色調、デザイン等は統一されている。
- 経済発展を遂げ、世界最先端の技術、ファッションを発信し続ける東京に、あらゆる分野のアジアの高度人材が集い、東京で学んだ人材が世界で活躍するなど、東京と世界を繋ぐ架け橋となっている。
- 自立したエネルギーシステムや防災機能を備え、平常時においても環境負荷の低減が図られつつ、万が一地震に見舞われた場合でも、自立と相互融通が可能な状態となっている。

これらの将来の東京の姿は、東京の超長期のグランドデッサンとしてのある程度の普遍性を有するものであり、アジアヘッドクォーター特区の目指すゴールに向けて、我々が共有すべきものとする。